

竹市明弘先生の人格の奥なる魂について

内 藤 可 夫

竹市明弘先生のご逝去の報せに接して以来、思い起こし、思い巡らせ、考えております。先生の叙勲の際に編集した『年譜と業績』のエピグラフとされたのが「人格の奥なる魂について」ということばでした。先生のご業績の題でもありますが、テーゼの形ではなかったため、その意をこれまで考えてきました。

一九八六年、教養部での哲学講義を受講させていただき、先生が初代研究科長となつて設立2年目の人間・環境学研究科に進学し、ご退官の年に学位をいただくまでご指導いただきました。既に二十年以上も前になりました。その後、先生が初代学長として創設された岡崎市の人間環境大学で、新しい理念の高等教育の実現というお仕事を手伝わせていただき、その後も大学理事であつた先生にご相談させていただく折毎に、ご指導いただいたことは幸運でした。

思えば、この『人間存在論』を創刊する際、表紙の意匠作

成のご指示をいただき、複数の案の中から選んでいただいたのは四半世紀前になります。その後も幾度か先生のご指示でデザインをする機会がありましたが、淡い色に変わっていくグラデーションを好んで選ばれました。そのことにあわせて思い出すのは、与謝蕪村の辞世の句「しら梅に明る夜ばかりとなりけり」を引いて、先生が死について話されたことです。闇に仄光る白梅が、白み始めた明けの光の中に泥んできく、そのイメージに重なるように思います。お話を伺った先生の研究室は、当時、教養部A号館にあり、デューラーの「騎士と死と悪魔」が飾られていました。

先生が人間環境大学の学長をされていた当時、定宿とされていたホテルアソシア豊橋のロビーでお話することが屢々ありました。そういった機会に私が先生にお伺いしたのは、哲学への立場についてでした。というのは、先生はそのころ、特定の具体的な哲学の議論を書かれること、話されることが

無くなっていたからです。それはご関心が研究科や大学の経営に移ったということではなく、哲学に対する立場に大きな変化があったためと思われました。哲学への最も優れたご見識を持つ先生の変化、そしてそれをあまり言葉にされないことについて、お聞きせずにはいられなかったということです。前述の通り、先生のご関心が常に、あるいは偏に死にあつたことは確かです。かねて鈴木正三の「死習う」については良い言葉だとおっしゃっていました。その正三が八十を前にして尚、夜半、死と無が胸に迫ると語った話（『驢鞍橋』）をしたのは、先生がお亡くなりになる前年でしたが、それは私のことだとおっしゃいました。ご幼少の病気が重い時の、お母様の必死の姿が記憶に残るとおっしゃっていました。それが先生の死に対する強烈な原体験となつて変わることがなかったのだと推察いたします。

もう一つ変わらずご関心があったのは、京都大学の哲学の伝統のゆくえでした。強い危機感を持たれ、あるいはその途絶を嘆いておられました。無論、かつての京都学派の哲学説を時代や文脈を無視して称揚することは忘却の最たる形と考え、その本質的限界への批判を維持されていきました。では、京都大学の哲学の伝統に先生が見出されていたのは何か。「京都学派」の全ての書物を圧搾しても得られない何か。

全国の大学改革の嚆矢となった教養部改革、人間・環境学研究科と人間環境大学の創設に際して、先生がどのようなお考えで新しい学問、教養を創始しようとされたのか、経緯と理念をお聞きしつつ、理論化してその実現の条件を探ってい

たのが十年前です。やがて現実と直面して気づかれたのは、学問は人間あつてのものであり、理念の言葉の奥にあるものを有つ人格なくしてはどうにもならないということでした。私が無惨な現実を漸く理解する前、既に先生には見えていたのではないかと思われまふ。京都大学の哲学、学問の伝統もまたそれを有つ人格に支えられていたのであり、褐虫藻を失った珊瑚を見たのでした。

先生が人間・環境学研究科の広報誌に臨済禅について文章を書かれたのはその頃でしょうか。また、古事記や歴史に関わる書物を読んでおられるともお聞きしました。先生のご関心が向けられていたその方向は、「人格の奥にあるべきもの」ではなかったかと思われまふ。つまり、死の無に正対し覚悟した古人とその系譜、それが産んだ精神の伝統、それは欧米には全く存在しないものであり、これに強く共感し、そこに身をおかれたのだと思います。「哲学に逢うては哲学を殺し」、そう考えると、新しい哲学を強力に探求されて、その後、語られなかった理由が見えたように思われます。いや、幾度か先生の言葉の中にお聞きしました。

我々の生も長からうとも何れ儂いもので、現今のパンデミックにおいては尚草葉の上におく露のごとく、我々に死の自覚と、その覚悟の上での生を促しているように思えます。今の今に至っても、思い起こし思い巡らせ考えているのは、先生が死をどのようにお迎えになったか、そのことです。「死習う」から死を死ぬところまで見定めていなければならぬものが、教えの要諦がおぼつかないことは、正三の弟子恵中

が「驢鞍橋」を書名としたところと同じく、申し訳ない限りです。

先生が人間環境大学の学長をされていた当時、鈴木正三が弟子とともに修行を続けた足助の恩真寺（山中の檀家のない訪れる人もない無住寺です）を探しあてて訪ねたことをお話ししたところ、強く関心を持たれたのですが、ついにご案内することができなかったのは心残りになりました。傾いた本堂裏には苔むした弟子たち、歴代住職の墓が正三の墓を囲んで並んでいました。寂寂とした無音の境内は数百年変わらないう様子でした。なぜか今でも自分がそこに立っているような気がしております。